厚生労働科学研究費補助金（エイズ対策研究事業）
分担研究報告書

個別施策層に対する固有の対策に関する研究

HIV 感染者・AIDS 患者に関する対策の研究

PWH/A のエイズ関連施策への関与の可能性と実現に関する研究

分担研究者　長谷川　博史　JaNP+（ジャンププラス／Japanese Network of People Living with HIV/AIDS）
研究協力者　梅野　攻良　JaNP+

研究要旨

本研究では PWH/A（People living with HIV/AIDS の略で HIV 感染者および AIDS 患者の総称）の社会参加、特にエイズ関連施策への関与に関して PWH/A 側の動機と社会の需要を調査することで、今後日本国内において PWH/A の社会参加にどのような可能性があり、その活動が社会、特に国民の保健行動にどのような影響を与えうるかを探るための調査・研究を平成 14 年度から三年計画で企画実施する。

現状では PWH/A が内在化させているフェルトスティグマによって PWH/A 自身が社会生活に自主規制を行う傾向があるために感染後の生活実態や感染事実を他人に開示することは少なく、PWH/A の存在や HIV/AIDS に対する社会認識はその感染の広がりの現実に比較してきわめて薄い。そのことがさらに社会におけるスティグマを再生産、増大させている。この悪循環を断つためには医療、予防、教育、人権などの諸分野において当事者の立場から発言する PWH/A スピーカー（講師）の存在が重要となってくる。

そこで PWH/A スピーカー派遣と育成を試験的に事業化し、その活動に評価、検討を加え有効な活動の方向性を模索する。さらに、三年間で日本国内におけるスピーカー育成、スピーカー派遣の実用的な研修プログラムおよび事業モデルの構築を行う。

初年度である平成 14 年度は国内の感染者ネットワークとして立ち上げられた JaNP+（ジャンププラス／Japanese Network of People living with HIV/AIDS）の PWH/A ミーティング（生活、治療に関する情報提供プロジェクト）を試行し、そこにおいて一般 PWH/A の社会参加意欲に関する小規模調査を行い予備調査とした。同時にスのピーカーとして活動する意欲のある人材の掘り起こしを試みた。

さらに現在すでに何らかの形でスピーカーとしての活動を行っているPWH/Aに対し、伝えたいテーマ、伝えるべき内容、伝える際に留意すべきスタンスを探るために12.5時間の研修合宿を行い、スピーカー養成プログラム作成の準備作業とした。

A. 研究の背景と目的

現在国内において加療中のPWH/Aがおよそ8000人前後と推測されるにもかかわらず自己のHIV感染事実を開示した上で社会的活動をする人材は極めて少ない。

PWH/A自身の中に自らのHIV感染を知ったことを契機に積極的に社会と関わろうとする意欲が少なからず現われることは医療者、NGO関係者の間で経験的に認識されていた。ただ、この段階ではPWH/A自身本来のライフスタイルが回復されないまま、PWH/Aという新たに発見した自己の属性にアイデンティを過剰に構築しようとする一過性の欲求である可能性が強い。このような状況下で自己の現実を受容できないまま語りだすことで極端に歪んだPWH/Aのイメージが喧伝される結果を生む例も散見された。

そこで、すでにPWH/Aスピーカーとして活動している人たちの中に、社会的な関わりをもつ欲求がどのような形で現われているか、社会の中にPWH/Aに対するどのようなニーズが存在するかを試行的事業の中から探り、将来、スピーカー育成プログラムの作成、スピーカー派遣事業のモデル構築を目指す。

この事業の実現による社会的影響を次のように考える。

1. PWH/AとHIV/AIDSの存在を伝える
2. PWH/AとHIV/AIDSの正しいイメージを広く知らしめる
3. PWH/AとHIV/AIDSに対する社会的偏見の解消を促進する
4. 感染告知を受けたPWH/Aが社会の差別的偏見を自己に向け内在化させることなく良好かつ積極的な治療姿勢を形成する
5. 感染告知を受けたPWH/Aの生活者としての自立を促進する
6. 前二項（4.5）の実現によって達成した実情をスピーカー活動を通して広く社会に伝えることでHIV/AIDSへの過度の恐怖感を払拭し検査への心理的障碍を軽減する。
7. PWH/AとHIV/AIDSが正しく認識されることで社会における予防が促進され、結果的に国民の性的健康が促進される。

開催日	開催地	会場、協働機関	参加人数
2002年8月9日	福岡市	国立九州医療センター	3名
2002年9月10日	広島市	広島エイズダイアル	2名
2002年11月10日	東京都	自主運営	20名
2003年2月11日	名古屋	国立名古屋病院	5名
2003年2月16日	大阪	国立大阪病院	20名
合計	5回開催		50名

B. 研究方法

【概要】

初年度である平成 14 年は次年度以降の本格的調査、事業実施に先行する準備作業として位置付け、すでに各 NGO、医療機関等で実施されている勉強会を実施し PWH/A が集まる場を作り、ここで PWH/A スピーカーとしての意欲を有する人材の掘り起こしと小規模の予備調査をおこなった。

ＮＧＯジャンププラス（以降 JaNP+と略）において実施している PWH/A スピーカー派遣事業を継続し、その経験に基きスピーカーとして必要な知識および技術習得のための研修を実施した。

(ア) PWH/A ミーティング

全国各地で HIV/AIDS の治療を続ける PWH/A に対して患者の立場からの情報提供を行い、東京、大阪、名古屋、広島、福岡の 5 都市で治療に関する勉強会「ジャンププラス PWH/A ミーティング」を開催した。

主対象を感染告知後 1 年以内の PWH/A とし、その自尊感情の回復と良好な治療姿勢の形成を円滑に行うための支援として位置付けた（プログラム第 1 部）。さらに、感染告知を受けて 2 年以上の加療者を対象に治療情報提供のプログラムを組み（プログラム第 2 部）、グランドルール適用範囲内である同一会場で参加者の情報交換と交流を目的として茶話会を実施した（プログラム第 3 部）。

① PWH/A ミーティング実施方法

参加資格：PWH/A 当事者に限定

講師：HIV/AIDS の診療に携わる医療者、看護師、心理職、MSW、NGO 専門スタッフ等

運営：JaNP+メンバーによる

会場：参加者である PWH/A の安心感を考慮し可能な限り医療機関の会議室を借りて実施

告知：

- 病院、NGO で確実に PWH/A 本人に手渡し、口頭で伝えられる場合は詳細の案内を直接渡してもらった。
- ホームページやメーリングリストなど当事者以外が情報を見ることが可能な場合は e-mail またはファクシミリで当事者本人に問い合わせてもらい、通院の病院、主治医、現在の治療状況などの簡単なアンケートに応えてもらい、PWH/A であることを確認の上、会場、内容、時間等の詳細情報を提供した。

その他：あらかじめグランドルールを提示し、自己責任による参加を呼びかけた。

② PWH/A ミーティング実績

③ プログラム

第 1 部　新たに感染を知った人のために
～治療と生活のアウトライン～

第 2 部　よりよく治療と向き合うために
～薬剤の変更と副作用～

第 3 部　交流会

(イ) スピーカーズビューロー

PWH/A の立場から予防、教育、保健など

の各分野にスピーカーを派遣すると同時に、PWH/A スピーカーとしての話すスタンスを検証し、技術向上のための研修を実施した。

① 講師派遣実績（2002 年 5 月 1 日～2 月末日）

スピーカー数：5 名

派遣件数：31 回

派遣先	主な対象	数	内容
学校授業	大学生 大学院生	3	PWH/A の生活 セクシュアリティ
学校催事	高校生	2	PWH/A の生活
医療機関	医療職、行政職、教員	5	PWH/A の生活 セクシュアリティ
NGO 研修会	NGO 専門スタッフ、ボランティア	5	PWH/A の生活 セクシュアリティ
コミュニティイベント	コミュニティ構成員	7	PWH/A の生活 セクシュアリティ
行政・予防イベント	一般	2	PWH/A の生活 セクシュアリティ
JANP+ 自主イベント	PWH/A 一般	6	PWH/A の生活 セクシュアリティ 治療
その他	一般	1	PWH/A の生活

② スピーカー養成研修

実施概要

目的：HIV/AIDS に関する包括的理解

日時：2003 年 3 月 14 日(金) 15 日(土) 16 日(日)

場所：神戸

参加人数：11 名（2 名部分参加）

参加者地域：東京、神奈川、大阪、広島

プログラム	時間
開講式（PWH/A スピーカーの役割）	60 分
スピーカーとしてのスタンス／エモーションリテラシーについて 講師　生島嗣氏（ぷれいす東京）	150 分
GIPA（PWH/A の施策参加促進） 講師　樽井正義氏（慶應義塾大学）	180 分
エイズウォーク参加（自由参加）	
薬害と日本のエイズ 講師　花井十伍氏	90 分
予防と疫学 講師　木村博和氏（横浜市大）	90 分
世界のエイズと外国人支援 講師　澤田貴志氏（港町診療所）	90 分
レポート作成	60 分
振り返り	30 分
合計	12.5 時間

＜倫理面への配慮＞

PWH/A のプライバシーと自由意志を尊重するために次の作業を経て実施した。

① PWH/A ミーティング

- ホームページやメーリングリスト参加者のリスク認識を促した上での自己責任と自由意志による参加の確認
- 参加者を PWH/A 当事者に限定するための確認作業
- グランドルール(プライバシーの尊重、他人の価値観の尊重、自己判断による情報選択等)の複数回のアナウンス
- ミーティング中は原則として仮名、匿名で行う
- ※参照　資料 1　PWH/A ミーティン

ググランドルール

② スピーカーズビューロー

- スピーカー活動が自由意志による決定であることの確認
- ピアプレッシャーの回避(勢いやムードに流されて PWH/A スピーカーの活動を開始することを避ける)とスピーカー活動に関するリスク認識の促進
- 自分の生活圏や職業、血縁、育成地域などから発生するスピーカー活動の限界領域の確認

C. 研究結果

(ア) PWH/A ミーティング

【概要】

本来このような PWH/A の勉強会形式の集まりは情報提供事業のひとつとして行われる。JaNP+ではこれを PWH/A 自らが提供することで自立した生活者としてのロールモデルの提示を最大の目的としている。

PWH/A に限定しているとはいえ、HIV 感染の現実を受容する過程にある場合や、個人情報漏洩の不安を抱えた PWH/A にとって自己の HIV 感染を開示して参加するには相当の覚悟が要求される。PWH/A ミーティング参加者はその意味において既に社会参加意欲の強い層に偏っていると言える。

PWH/A ミーティング参加者について

調査対象（東京、大阪、名古屋の参加者）

総数　45　うち有効票　35

【年齢】

30 歳～39 歳が全体の 45%を占め、続いて 20 歳～29 歳が 31%で 20 歳～39 歳で全体の 76%を示している。これは近年の感染者、患者報告数におけるこの年代の占める割合とほぼ一致するが、20 歳代と 30 歳代の比率に関しては逆転する。

【性別と性自認】

男性 33 名　女性 2 名の構成で、男性同性愛者が 80%を占めた。これは会場ごとに告知の方法が異なったこと、既に PWH/A ネットワークの活動として男性同性愛者に特化した活動が先行していたことの理由も考えられるが、この集団に対する情報提供が進んでいることが PWH/A の社会参加意識を高めていることが推測される。

【感染経路】

大多数が性感染であるが、これは男性同性愛者の占める割合が高いことと、JaNP+のネットワークの前身が男性同性愛者に特化したものであったことの影響が挙げられる。

【周囲への感染事実の告知】

友人への告知は 65%を超えているが、これは最も多い男性同性愛者のコミュニティにおいて HIV/AIDS に対して受容的であることの影響がうかがえる。また同じ PWH/A 当事者に限定した集まりであるとはいえ、職場での告知を行っているものが 20%の高率を示している点は注目に値する。

【就労状況】

休職中、就職活動中、無職と非就労者の割合が 22%の高率を示している。

【エイズ関連の活動に対する参加意欲】

37%の参加者が何らかの形での活動に意欲を示しており、その内容についてはPWH/A同士の交流、情報提供、予防啓発、偏見差別の解消の順で多かった。

【関心事項・直面する問題点】

医療、福祉、情報、人間関係、就労、セックスと生活全般に多岐にわたる関心を示している。

【情報の入手先】

医師を除けば病院のカウンセラーやソーシャルワーカー（51%）、インターネット（60%）が多いが、情報の入手先を病院、NGO、メディア、口コミと分類して比較するとメディアに関連する項目を選んだ者が21（60%）、病院に関連する項目を選んだ者が18（51%）、NGOに関連する項目を選んだ者が14（40%）の順であった。

(イ) スピーカーズビューロー

【概要】

現在スピーカーとして派遣できる人材は限られており、また派遣依頼もPWH/Aの実態を話して欲しいという抽象的な内容が多い。そのため公演内容もほとんどがPWH/Aの生活の現状という幅広い内容をスピーカーの個人的体験に基いて講演活動を行うに留まっている。現状ではスピーカー派遣の目的の明確化を行い、その目的実現のためにスピーカーが取るべきスタンスについて検討を行った。

その結果、依頼内容と対象層の細分化を行い、そのニーズに合わせてスピーカーの派遣を行う必要が確認された。今後、スピーカー派遣後、依頼者に対するアンケート調査を行い、講演内容に関する満足度および改善点を明らかにしていく。

さらに、スピーカーとして活動する人材に関しては、スタンスを共有するべく研修を行っていく必要が確認された。

① スピーカー派遣事業に関する検討・評価会

実施概要

目的：平成14年度スピーカー派遣事業の検討

日時：2003年1月10日

場所：JaNP+事務所および特設会場

方法：グループディスカッション

参加者：スピーカー4名

生島嗣氏（アドバイザー）

スピーカーズビューローの事業目的を次のように確認した。

1、ピーカー派遣事業の目的について

JaNP＋のスピーカー派遣事業は次の活動を行い、社会からの要請に応えると同時にPWH/A自らが積極的に社会参加を果たすことを目的とする。

- 生活者としてのPWH/Aの実態を伝え、HIV/AIDS問題の存在を訴える
- 偏見、差別を解消し、PWH/Aの人権が保障される社会状況を実現する
- PWH/Aの立場から予防を初めとするエイズ関連施策への提言、提唱を行う

2、スピーカーのスタンス

前項に挙げられた目的を実現するためにスピーカーは次の点に留意すべき。今後、次の各項目に関して具体的な評価と改善のための研修を実施する。

- 可能な限りPWH/A全体が直面する問題を踏まえたうえで発言し、個人の経験によって獲得した見解と一般の問題を区別して発言する。
- 自らの体験を中心に説得力のある話題を提供する。ただし自らの体験は必ず振り返り、普遍化するための作業を行う。
- 伝えるための技術（話術）を向上させる。
- HIV 感染症に関する正しい認識を普及させるためにスピーカー自らが HIV/AIDS に関し研修を受け、AIDS の歴史、治療の概略、セクシュアルヘルスへの正しい理解、予防に対する正しい認識を持つ。
- 多様なPWH/Aの立場において、可能な限り中立を維持するために、スピーカーは特に次の点に留意して発言する。
  1. 現在病院において一般的に行われている治療に対して肯定的な立場で発言する。（抗HIV薬の否定、アルタナティブ療法のみの推奨、特定の病院やＮＧＯの根拠のない批判等は行わない）
  2. 感染経路によるＰＷＨ/Ａの区別をしない。
  3. ＰＷＨ/ＡとしてHIV感染の否定的な側面のみを強調しない。（社会的孤立、未治療、未就労、性生活の未回復など、自己の個人的立場の正当化を行わない）
- HIV感染予防、PWH/A支援といった社会貢献への寄与
- 守秘（個人が特定される話題を避ける）
- その他、PWH/Aの多様性への配慮

3、実践上の注意点

- 一方的に話すのではなくテーマや聴衆に合わせて話題提供の技術や話術の向上が必要
- 自分の体験を生のまま体験談としてぶつけるのは聞きに来てくれた人に失礼なのではないか

→ emotion literacy（自分の感情を認識し整理・抑制すること）でよりspeaker の体験を普遍化できるのではないか

- スピーカーとして自分の得意分野や役割を認識することが大切
- 一般論ではなく自分の体験に基いた形で話すことで説得力が生まれる

4、今後の改善点および課題

- 依頼者の講演内容に対する評価（満足度、改善点、ニーズ等）
- スピーカー研修（知識、認識、話術等）
- 専門分野のスピーカー育成（予防、人権、医療、教育、雇用など）

② PWH/Aスピーカー養成研修（2003年3月実施）

研修の目的はスピーカーとしてのスキ

ルの確立だが、期間、時間ともに十分とは言えず、最終的に必要と思われる研修過程の三分の一程度のプログラムを試行的に実施した。この限られた時間の中で次の点を目的とした。

- ●スピーカーとしてのスタンスの確認
- ●自己の体験に偏らず HIV/AIDS について包括的な視点を獲得する。

【参加者の属性】

総数　11 名　有効票 10 票

F1. 性別　男　11 名

F2. 性自認　同性愛者　10 名
　　異性愛者　　1 名

F3. 年齢　20 歳代　5 名
　　30 歳代　4 名
　　50 歳代　1 名
　　未回答　　1 名

F4. 感染経路　性的接触　10 名
　　血液製剤　　1 名

F5. 現在の生活状況

就業、アルバイト、学生、ＮＧＯ専従と基本的に何らかの社会活動を行っている。さらに、有職者もエイズ関連のＮＧＯ活動に参加するなどしている。趣味も読書、料理、ピアノ、歌唱、乗馬、旅行、美術鑑賞、フィットネス、パソコンと幅広く個人生活の充実が伺える。

【スピーカー活動に対する意欲】

全般的に参加意欲は高く、その対象層、場所などが広範に渡るいっぽうで、テーマや関心事などが明確化されているケースも見受けられた。さらに露出に関してもマスメディア以外なら可能と応えた者が過半数であった。

Q2、スピーカーとして興味のある対象層、場所

対象層・場所（複数回答可）	（人）
学校などの教育	7
医療・保険・心理などの専門職	5
予防啓発の NGO	6
企業の人事・労務担当者	5
自分の属するコミュニティ	9
その他	2
スピーカーとしての活動予定なし	0

Q3、顔出しの可能性（複数回答可）

	（人）
すべてのメディアに可能	1
対象が限定されたメディアなら可能	6
公開の場所（居住地以外）	7
公開の場所（対象者限定）	7
居住地以外かつ対象者限定、非公開	7
一切不可	0

Q4、話してみたいテーマ（複数回答可）

	（人）
日常生活	5
社会生活	3
性の問題	2
予防啓発	2
社会参加、権利問題	2
聾の感染者に対する情報発信	1
何でも	4

Q5、HIV/AIDS の関心事（複数回答可）

	（人）
治療・薬剤情報	3
PWH/A に関わる情報	3
コミュニティ活動	5
社会参加	4

エンターテイメント	1
情報発信の多様性	2
予防啓発	2

※参考　添付資料 2　JANP+「PWH/A スピーカー養成研修」プログラム

※参考　添付資料 3　同　参加者の感想

D. 考察

(ア) PWH/A ミーティング

今回 5 都市で行ったミーティングでは会場や告知方法の差もあったが、大都市部と地方中核都市間で PWH/A の意識そのものに格差が感じられた。とりわけ地方会場においては当日のキャンセルが多く、事前に確認・把握しておいた参加者数に比較して出席率が著しく低かった。

このことから PWH/A の生活する環境によってプライバシー漏洩など差別不安由来の自主規制も強いことが推察される。

プログラムはより多くの PWH/A に共通した話題を提供するために、治療の問題を中心にしたが、内容が感染告知後 1 年未満の者を対象にしたため、結果に偏りが生まれたと思われる。また、これは会場ごとに病院との連携の方法、病院側の認識が異なったことにもよる。

プライバシーの保護に関して参加者の自己責任を徹底してアナウンスしたために、ある程度社会参加意識の高い層が集まる結果になった。この点は PWH/A 全体の生活実態や意識を調査するには問題があるが、PWH/A スピーカーの掘り越しとしてはきわめて有効であることが確認できた。

(イ) スピーカーの活動領域

スピーカーズビューローにおけるスピーカーのとらえかたについて参加者間でも若干の齟齬があり今後幅広く希望者を募り事業化するためにはこの点の明確化が必要と思われる。

そこで、スピーカーの発言場面および対象層に応じて PWH/A スピーカーの活動領域を５つに分類する。

a. 個人対象のスピーカー活動

例：家族、パートナー、友人。場所は鎖的で個人情報の広がりはほとんどない。

b. グループ対象のスピーカー活動

例：友人集団、家族や親族、職場の親しいグループ、サークル等の小グループ、バーの常連といった個人的な関係によって形成された小集団。

場所は閉鎖的で個人情報の広がりは生まないようにも思えるが、PWH/A 自身の生活圏に密着している場合はむしろ個人情報の保全は困難と思われる。

c. コミュニティ対象のスピーカー活動

例：町会・子ども会などの地域コミュニティ、ゲイコミュニティ、同好会、企業、組合、職業団体、ＮＧＯ等。

聴衆が何らかの共同性を有した不特定多数の集団。通常場所は開放され、かつニュースレターや会報といった独自のメディアを有している場合も多い。ここにおいて個人情報の守秘はほとんど期待できない。しかし、参加に関しては自由意志による場合が多く、PWH/A あるいは HIV/AIDS に対する理解が得やすい。

d. 社会を対象としたスピーカー活動

例：行政、医療機関、保健機関、教育機関等

対象が組織化・制度化された集団。場合によっては聴衆が自発的な意思ではなく無関心層が参加する場合も多いと思われる。

e. マスメディア対象のスピーカー活動

例：テレビ、雑誌、新聞等

個人情報に関しては全く制限を設けられない公表の場であるとともに、ディレクター、編集者、ライター、記者といった第三者が介在した表現になる。

以上のうち、スピーカーズビューローの活動目的が社会的影響を前提にしている事からｂ～ｅを想定するのが妥当と考える。また、ｂおよびｃについては PWH/A スピーカーの不利益も予想されるが、本人の意志を尊重しその生活圏、活動圏との繋がりを慎重に避けることでスピーカー活動は可能と考えられる。

(ウ) スピーカーズビューロー

a. 動機の確認と適性の判断

個別にリクルートした 3 名のスピーカーで始めた派遣事業も 5 会場の PWH/A ミーティングを通じてスピーカーとしての活動に関心を持つものが約 15 名までに増えた。

しかし PWH/A に意欲がある場合もスピーカーとしての活動に適性があるとは限らない。その動機が真に自らの HIV 感染を客観的な視点で受容し、本来のライフスタイルや QOL を回復したことによって生まれたものなのかどうかが重要なポイントと成る。PWH/A であることにアイデンティティを過剰に構築して逃避的な動機から生まれてくる可能性もあるのでスピーカーの採否のガイドラインを心理職、精神科医などの専門家との共同作業で作成する必要があると思われる。

ちなみに今回の研修参加者の選抜の目安として次の３点を基準にした。

1. 治療（服薬に限らず）を開始、継続できていること。
2. 就労していること。
3. 性生活を回復（拒否していない）していること。

b. スピーカー支援体制

不特定多数を対象としてスピーカー活動を行うにはかなりの精神的ストレスを感じる。また、慎重にスピーカーの不利益を回避したとしても、予測できない社会的な不利益や困難に直面することもある。そこで PWH/A スピーカーをさまざまな側面から援助し、さらにその技術の向上や社会的立場の向上を促進していくべきであると考える。

c. スピーカー研修の内容、運営面の検討

今回実施した PWH/A スピーカー養成研修について次の点に検討を加える必要がある。

1. 参加者の募集方法と選抜方法
2. プログラムの内容の再考
3. 研修の手法開発
4. 参加者の多様化（地域、性別、性自認、感染経路等）

d．派遣先の調査

本年度のスピーカー派遣先に対して調査を行い、そのニーズを調べJANP+のスピーカーが果たす役割を把握する必要がある。

e. 先行事例研究とマニュアル作成準備

平成 16 年度の試行事業着手に先行し、諸外国の先行事例と平成15年度までの研究で得た知見とを比較検討し、国内の現状に即したスピーカーマニュアル作成の準備を行う。そのため、海外の感染者団体との交流をはかり、情報の入手につとめる。

さらに本年度の研究を拡大し、PWH/A側のスピーカー活動への意欲と社会（派遣先）の需要に関して実態を本格的な調査を行う必要がある。

E. 結論

スピーカーズビューローに関して、PWH/A 側に十分な意欲がある層が存在し、現実にスピーカーとして活動しているPWH/A の数も増加している。

いっぽう社会におけるニーズは講師派遣実績の内容からもわかるとおり、一部の医療関係のケースを除けば PWH/A に特別な何かを求めるのではなく、とにかく PWH/A の存在を一般に知らしめることで意識化をはかりたいというレベルに留まっている。

このように派遣先の需要と PWH/A スピーカーの意欲に齟齬があるものの相互にスピーカーズビューローへの需要もがあることが確認された。これは PWH/A 側からの働きかけ次第でその社会的影響は大きくより良い方向に働くことを示している。

ただし、HIV/AIDS について伝えるべき対象は多様化し、細分化される傾向にある。聴衆の知識レベル、認識、関心の度合い、社会的立場などを考慮し、スピーカー側が表現能力を高め、的確な伝達方法を身につける必要がある。そのためにはマーケティングの手法による対象層の分析が有効であり、さらに心理学、教育学、社会学などさまざまな他分野の専門家との学際的かつ実務的レベルでの協働による手法開発、システム構築が急がれる。

添付資料 1　JANP+「PWH/A ミーティング」グランドルール

添付資料 2　JANP+「PWH/A スピーカー養成研修」　参加者の感想

参考　Lifting the Burden of Secrecy ～A Manual for HIV-Positive People Who Want to Speak Out in Public～ APN+発行

添付資料 1　JaNP+「PWH/Aミーティング」グランドルール

【PWH/A ミーティング参加にあたってのご注意】

その１

この集まりはＰＷＨ/Ａ（HIV 陽性者）のみなさんが生活をする上で必要な情報を共有するための集まりです。参加者はＰＷＨ/Ａ本人に限定されます。講師、アドバイザー、運営スタッフ以外でご自分の HIV 感染を確認されていない方はご退場下さい。申し訳ありませんがＰＷＨ/Aのパートナー、ご家族、ご友人の方も例外ではありません。

私たちＰＷＨ/Aが安心して集まる場を作るためにご協力、よろしくお願いします。

その２

ミーティングへのご参加ありがとうございます。JaNP＋ではお互いに安心してミーティングを行うために次のようなルールを設けています。このルールを守れない方のご参加はおことわりします。また、ミーティング開始後であっても途中でご退場いただく場合もあります。また、ご参加される場合はこの参加規則に同意いただいたものとみなさせていただきます。

1　ここで知った参加者の個人を特定できる情報はここ以外の場所では決して誰にも話さないでください。(氏名、ハンドルネーム、ニックネーム、セクシュアリティ、職業はもちろん、居住地域、行きつけの店、体型などの断片情報も組み合わせることで個人が特定できる場合がありますので注意してください)

2　参加者にはさまざまな価値観の方がいらっしゃいます。その考えを一方的に批難したり自分の考えを押し付けたりせず、それぞれの立場を尊重してください。全体の進行については主催者の指示に従っていただきます。

3　ここで提供される情報は JaNP+が推奨するものではなく、あくまでもさまざまな考え方の中の一例としてご紹介するものです。他からも積極的に情報を集め、医師をはじめとする各分野の専門家などと相談して、ご自分の判断で情報の選択、実行の決定を行ってください。

4　この集まりは個別の相談を行うものではありません。質問や発言はできるだけ多くの参加者で共有できるようご配慮ください。

5　ミーティングでは参加者のみなさんが安心して参加できるようにプライバシーの保護について、主催者は最大限の努力をいたしますがこれを保障することはできません。自分の個人情報は自分で判断して、自分の責任において開示してください。

以上

JaNP＋活動支援グループ「PWH/A ミーティング」担当

添付資料２

JaNP+「スピーカー養成研修」　参加者感想（まとめ）

スピーカーズビューロー参加者の第一の感想として上がった第一の声は、「話し語る」ことの意味付けが、本研修で変わったというものであった。「初めは、ありのままに話せばよいと思っていた」、「PWH/A としての経験を話し語るだけでは伝わらない」という自らのスピーカー経験の反省から、今何故 PWH/A のスピーカーが求められるのかといった根本問題に立ち返った PWH/A スピーカーの存在意義を問い直す研修会となったようであった。

情報発信の在り方として、現段階ではパンフレットをはじめとする印刷物が広く普及しているが、それだけでは伝わり難い PWH/A のリアリティや感情を、オーディエンスを前にしながら共有していく空間を創出することこそが PWH/A スピーカー育成の課題であるのではないかと結論付けられた。その前提として、スピーカーとなり、スピーカーであることへの動機付けと共にスピーカー本人の個人的な限界設定をどのように意識化するのか、話す技術をどのようにして学んでいくのか等、今後の実践的な課題も多く問題提起された。また、技術に関しては、スピーカーとなり何を伝えていくのかといった動機付け以前に、学ぶ必要性があることもまた指摘された。技術の習得には、スピーカーの特性並びにキャラクター、どのような場面・機会での従事がスピーカー本人の特性に合致しているかを本人自らが知る必要があり、更にはスピーカーが持ちえる表現手法の向上もその主眼となろう。以上のような技術習得と併せて、PWH/A スピーカーが活動を展開していくことが出来る実践の場を広く創出していくことも同時に、JaNP＋の活動として求められよう。

そもそも講演をはじめとするスピーカーの活動の場には、オーディエンスが存在することを忘れてはならず、オーディエンスの気持ちを捉え、ラポールを形成していく技術もまた学ぶ必要があろう。更には対象者の求めるニーズが何であるのか、どのような情報をどこまで伝える必要性があるのか等、講演の主催者並びに主催団体と共に対象者のニーズ・アセスメントをはじめとする予備的な基礎調査を継続して実施していくこともまた求められるはずである。この為にも、JaNP＋が各団体の基本的な特性や情報を収集しつつも、各団体のネットワーク形成を強固に推進していくことを主眼に、JaNP＋の活動を展開していくことが必要であろう。

またスピーカーが活動を予定している場は、何も対象者が特定されたものだけではなく、社会一般に対する啓発をも併せて考えていく必要性があることが、今回の研修で再確認できた。特にマスメディアを通じた情報発信の手段並びに伝えるべき内容の選択等、PWH/A が積極的に協同していくことの出来る機会は、まだ広く存在しているはずである。今日のマスメディアや社会の HIV/AIDS に対する認識には、「日本のエイズ問題は終結した」といったものがあり、

改善するべき余地がある。薬害やMSMの問題等、一時期話題となったテーマに関する「事実」や「現状」を改めて伝えるのみならず、話題として上ってこることのなかった在日外国人のHIV診療体制の問題や、情報伝達が不完全な聾者の問題など早急に取り組みが必要な課題の再確認も併せて、今回の研修会で実施された。

今回の研修の一つの鍵概念としてGIPA（Greater Involvement of People living with HIV/AIDS, パリ・エイズサミット宣言）が取り上げられたが、GIPAは「自分のことは自分で問題提起、解決していく」という確認であり、JaNP＋の活動はGIPAの概念の一歩先を進んだ取り組みであることが話し合われた。GPPA（Greater Participation of People living with HIV/AIDS）といった新しいempowermentの取り組みこそが、PWH/A個々人が属するコミュニティの向上並びに社会一般の底上げに繋がるはずである。今日の保健財政が逼迫している現状を踏まえるのであれば、PWH/Aが協働しながら展開される予防啓発が早急に実施されていく必要性があろう。以上の諸点を考慮しつつ、今後JaNP＋ではPWH/Aスピーカーの育成並びにHIVコミュニティのネットワーキングに力を入れていく所存である

厚生労働科学研究費補助金
エイズ対策研究事業
「個別施策層に対する固有の対策に関する研究」平成14年度研究報告書

発　行　日　平成15（2003）年3月
主任研究者　樽井　正義
108-8345 東京都港区三田2-15-45 慶應義塾大学文学部樽井研究室
Tel. & Fax.: 03-5427-1131　　E-mail: tarui@flet.keio.ac.jp